

令和 6 年 4 月 19 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02520

研究課題名(和文) 幼児期，児童期の道徳感情をふまえた教材開発とその効果の検証：罪悪感と恥に着目して

研究課題名(英文) Development of Teaching Materials Based on Moral Emotions in Preschool and Childhood and Their Effectiveness: Focusing on Guilt and Shame

研究代表者

石川 隆行 (Takayuki, Ishikawa)

宇都宮大学・共同教育学部・准教授

研究者番号：50342093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、道徳感情とされる罪悪感と恥に着目し、幼児期，児童期を対象とした新たな道徳教材の開発を進めることを目的とした。

研究期間全体の成果について、1つ目として、罪悪感と恥を喚起すると考えられる絵本を明らかにした。2つ目として、絵本や人形劇を教材として用いることは、罪悪感、恥という道徳感情の喚起だけでなく、道徳感情を抱く理由に影響を及ぼすことを見いだすことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、道徳感情とされる罪悪感と恥に着目し、幼児期，児童期を対象とした新たな道徳教材の開発を進めるうえで、絵本や人形劇の使用が重要であることを明らかにした。また、とくに罪悪感を育むうえで、罪悪感が通文化的特徴を有することから、絵本や人形劇の使用が国内外において有効である可能性を報告した。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to focus on guilt and shame, which are considered to be moral emotions, and to promote the development of new moral teaching materials for preschoolers and childhood.

The results of the whole research period were as follows: First, we identified picture books as evoking feelings of guilt and shame; second, we found that using picture books and puppet shows as teaching materials not only evoked moral feelings of guilt and shame, but also influenced the reasons for having moral feelings.

研究分野：発達心理学

キーワード：罪悪感 恥 道徳感情 教材開発

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

子どもの道徳性の伸長には道徳感情の育成が重要である。わが国では、道徳が教科として位置づけられ、道徳教育の効果的な授業実践のため、道徳行動を動機づける道徳感情を新たに捉えた教材を用いる必要がある。

従来、道徳教育の教材は数多く開発されているが、幼児期の教材は十分ではなく(中山, 2017)、幼児期、児童期を対象とした道徳教育が実践できる教材が必要である。そこで、本研究では、罪悪感、恥という道徳感情に焦点を当て、幼児期、児童期の子どもに用いることができる道徳教材を検討した。以下、研究期間に実施した2つの研究について、それぞれ研究目的、研究方法、および研究成果について報告する。

2. 研究の目的

(1) 絵本から喚起された感情について 罪悪感、恥および道徳心に着目して

道徳教育の効果的な授業実践のため、発達段階にあわせた教材検討、開発が重要である。そこで、本研究では道徳感情とされる罪悪感、恥および道徳心に着目し、従来、道徳感情を高めると考えられている絵本を用いて、絵本から喚起される感情について検討を行った。

(2) 5歳児の罪悪感に人形劇での場面視聴が及ぼす影響について 中国と日本の5歳児の分析から

罪悪感とは、人が基準や規則を逸脱した際に喚起される。近年、人形劇が子どもの社会性に影響を及ぼすことが報告されている(山田・古相, 2017)。そこで、2つ目の研究では、人形劇での場面視聴が5歳児の罪悪感に及ぼす影響について検討した。その際、中国と日本の5歳児を対象とし、中日の5歳児における罪悪感の特徴について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 絵本から喚起された感情について 罪悪感、恥および道徳心に着目して

研究参加者 大学生20名であった。

道徳性の測定 手島・安保(2017)が開発した道徳的態度尺度を用いた。この尺度は5つの因子(自己の追究、集団・社会への貢献、ルール・マナーの遵守、他者の尊重、畏敬の念)から構成されている。本研究では各因子から2項目ずつ抽出し、計10項目を用いた。また、玉田・松田・遠藤(2004)が用いた道徳的規範尺度から正義・規範尺度の中から3項目(友達と一緒に行動するときには、悪いと思うことでもついやってしまうなど)を使用した。項目における評価は、「絵本を読んだ後、あなたは次の項目の行動をどのくらいしそうですか」という問いについて4段階(全くあてはまらない～とてもよくあてはまる)で行った。

感情評価 罪悪感、恥および道徳心について、絵本を読み終えた後、「絵本を読んでいる最中に、どのくらい感じましたか」と尋ね、「感じない」から「非常に感じた」の10段階で評価した。

手続き 日本全国の19の公共図書館におけるブックリストと1冊の養育者向けガイドブックを参照して抽出された絵本113冊(村瀬, 2010)および大学生を対象とした予備調査にて罪悪感、恥および道徳心を喚起する絵本6冊のうち、ストーリー性の無い絵本を除外した106冊の絵本を評価対象とした。106冊の絵本については、それぞれA(21冊)、B(21冊)、C(21冊)、D(21冊)、E(22冊)の5グループにランダムに分類した。研究参加者4名が各グループのすべての絵本について感情評価を行った。

(2) 5歳児の罪悪感に人形劇での場面視聴が及ぼす影響について 中国と日本の5歳児の分析から

研究参加者 中国の5歳児78名(男児37名、女児41名)、日本の5歳児61名(男児30名、女児31名)を対象とした。人形劇の場面(参加者間要因)の内訳は積木場面47名(中国25名、日本22名)、仲間外れ場面46名(中国26名、日本20名)、保育室場面46名(中国27名、日本19名)であった。

罪悪感喚起刺激 3場面の人形劇動画(日本語および中国語)を事前に作成した。内容は、積木場面(擬人化した2つの野菜が、積木遊びをしてタワーを完成させる。完成後、1つの野菜が席を外し、いない間に、もう1つの野菜が積木のタワーを倒してしまい、戻ってきた野菜とともに見つめ合う。戻ってきた野菜が「大丈夫だよ」と言う)、仲間外れ場面(擬人化した3つの野菜が積木で遊んでいるところに、1つの野菜が仲間に入ろうとする。しかし、仲間に入れず、遊び続ける)、保育室場面(擬人化した4つの野菜が保育室で、お弁当を食べて、その後、仲良く家に帰る)であった。

手続き 保育室で実験者(女性、24歳)と5歳児の2名で積木のタワーを完成させた。完成させた後、実験者が5歳児に「タワーを見ていて欲しい」と言い、席を離れた。実験者がいない間に子どもが積木に触れると倒れるよう、タワーは細工されていた。実験者はタワーが倒れ

たことを遠隔で確認した後、席に戻り、何も言わずに5歳児を見つめてから「大丈夫だよ」と言った。そして「人形劇でも見ようか」と伝え、3種類の人形劇場面（音声あり動画）のうち1種類が5歳児へランダムに提示された。視聴後、5歳児が積木タワーを倒したことについて、まずは罪悪感の程度を5歳児に尋ねた。評定は「あやまりたい気持ちにならない」、「少しあやまりたい気持ちになる」、「とてもあやまりたい気持ちになる」の3段階評定であった。実験者が上記を口頭で読み上げながら、それらと対応させた大きさの をカードで提示して、5歳児に を1つ選択させた。「少しあやまりたい気持ちになる」および「とてもあやまりたい気持ちになる」のいずれかを選択した5歳児には、「どうして謝りたい気持ちになるの」と罪悪感の理由についても尋ねた。実験の所要時間は約10分であった。

4. 研究成果

(1) 絵本から喚起された感情について 罪悪感、恥および道徳心に着目して

絵本1冊につき研究参加者4名の各感情における評定を合計し、平均値を算出した。絵本160冊全体の罪悪感平均値は9.10 ($SD = 0.59$)、恥平均値は7.08 ($SD = 0.42$)、道徳心平均値は20.04 ($SD = 0.42$)であった。

絵本から喚起された感情である罪悪感、恥および道徳心が、どのように道徳性と関連するのかを検討するため各感情を説明変数とし、道徳性における尺度を目的変数とする重回帰分析を行った。なお、道徳性尺度における得点は、絵本1冊について4名の研究参加者が評定した得点を合計した。重回帰分析の結果、ルール遵守について罪悪感と道徳心の有意な正の影響（罪悪感 $\beta = .30$, 道徳心 $\beta = .29$, $p < .01$ ）、また恥の負の影響（ $\beta = -.21$, $p < .05$ ）が認められた（ $R^2 = .20$, $p < .01$ ）

本研究で使用した絵本から、罪悪感、恥および道徳心が喚起されることが明らかになった。また、絵本から喚起された感情と道徳性の関連を検討した結果、罪悪感と恥、および道徳心が道徳的態度と関連し、罪悪感と道徳心がルール遵守の道徳的態度を高め、恥がその態度を低める可能性が示唆された。

(2) 5歳児の罪悪感に人形劇での場面視聴が及ぼす影響について 中国と日本の5歳児の分析から

人形劇の各場面における罪悪感の評定者数について χ^2 検定を行った。その結果、人形劇場面それぞれにおいて中国と日本の5歳児の人数に偏りは認められなかった（積木場面:Fisherの正確検定 $p = .198$, 仲間外れ場面: $\chi^2(2) = 2.74$, $p = .255$, 保育室場面:Fisherの正確検定 $p = .367$ ）。これにより、人形劇場面の視聴後における中国と日本の5歳児の罪悪感の強さは同様であることが示唆された。

次に、「あやまりたい気持ちにならない」と回答した5歳児のデータは除外した上で、罪悪感を抱いた「理由を回答したか否か」に着目し、国別・人形劇の場面別に該当人数を以下に示した（Table 1, 2）

Table 1 人形劇場面別の中国人5歳児の理由回答者数 (%)

	理由あり	理由なし
積木場面	13 (68.4)	6 (31.6)
仲間外れ場面	4 (22.2)	14 (77.8)
保育室場面	11 (50.0)	11 (50.0)

Table 2 人形劇場面別の日本人5歳児の理由回答者数 (%)

	理由あり	理由なし
積木場面	11 (64.7)	6 (35.3)
仲間外れ場面	3 (20.0)	12 (80.0)
保育室場面	6 (40.0)	9 (60.0)

Fisherの正確検定を行った結果、Table 1, 2においてそれぞれ有意な偏りが認められた（ $p = .018$, $p = .041$ ）。残差分析の結果、中国と日本のいずれにおいても、罪悪感の理由を述べた5歳児の人数は積木場面において有意に多く、仲間外れ場面において有意に少ないことが明らかになった。本研究の結果から、視聴した人形劇の場面によって、罪悪感を抱いた理由を説明できるか否かに差が生じる可能性が考えられる。

本研究は、道徳感情とされる罪悪感と恥に着目し、幼児期、児童期を対象とした新たな道徳教材の検討、開発を進めるうえで、絵本や人形劇の使用が重要であることを明らかにした。とくに、絵本や人形劇は罪悪感、恥という道徳感情の喚起だけでなく、道徳感情を抱く理由に影響することを見いだすことができた。

また、罪悪感の通文化的特徴が示唆されたことから、罪悪感を育むうえで、絵本や人形劇の使用が国内外において有効である可能性を報告した。

幼稚園児、小学生を対象とした道徳教材の開発において一定の成果を得たことから、引き続き、保育、学校現場の先生方と共同して、道徳感情を育成する授業実践を行いたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石川隆行・宮代こずゑ 他18名	4. 巻 65
2. 論文標題 遊びって学び！！～やり遂げようとする力から見える教育課程～	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 幼稚園実践資料：研究紀要	6. 最初と最後の頁 3-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川隆行・宮代こずゑ 他18名	4. 巻 64
2. 論文標題 遊びって学び！！～やり遂げようとする力を支える環境と援助～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 幼稚園実践資料：研究紀要	6. 最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川隆行・宮代こずゑ・稲川知美・坂本修子・田野邊涼	4. 巻 7
2. 論文標題 5歳児の語い理解と創造性の関連について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育実践報告	6. 最初と最後の頁 315-318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石川隆行・佐藤鮎美
2. 発表標題 絵本から喚起された感情について 罪悪感，恥および道徳心に着目して
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤鮎美・石川隆行
2. 発表標題 絵本における登場人物および読み手の感情喚起の関連 読み手の没入状態に着目して
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 尹芸静・石川隆行・宮代こずゑ・石川由美子・佐藤鮎美
2. 発表標題 5歳児の罪悪感に人形劇での場面視聴が及ぼす影響について 中国と日本の5歳児の分析から
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 鮎美 (Sato Ayumi) (90638181)	島根大学・学術研究院人間科学系・講師 (15201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------